

第1章 戦場

樺太からの引き揚げ(3)

人生を狂わされた戦争

笠松貞子さんのお話から

○樺太 表紙裏地図

○本斗町 表紙裏地図

○真岡 表紙裏地図

○青酸カリ 猛毒の薬品

猛毒で致死量は○

一五グラム。

○自動小銃 引き金を引

いている間、自動的・連続的に弾丸が発射される

銃。

私は昭和二年（一九二七年）九月に樺太の本斗町で生まれました。生家は大正十四年（一九二五年）にこの地で、金物店を始めました。私たちは、昭和二十年八月二十日に、万が一、樺太にソ連が入つてきたりと、中学一年生の弟や父を残して、母と娘たちのみで引き揚げてきました。

その八月二十日は、樺太の真岡に爆弾が落とされ、郵便局の九人の乙女が青酸カリを飲んで、「さようなら、さようなら。」と言つて薬死したと聞いています。今は、稚内に九人の乙女の碑が建っています。そのときに、ソ連兵が入つてきて、真岡の男性たちの中には、港の防波堤に立たされ、自動小銃でバンバンバンバンと殺された人もいたと聞いています。私は女学校を出ていますが、先生もそこで殺されたという話も聞いています。そういう悲しい話がかなりありました。

真岡の銃撃があつたその日の午後から、私のまちにも飛行機が飛んできて、爆弾が落とされました。遠い方で爆弾の音がして、それからはもう爆弾がおつかなくてがたがた震えていました。それから、ラジオか何かのニュースで本斗の方に爆撃機が向かっていると聞いて、私は家の庭に掘つてあつた防空壕に親子全員で入つて、その中でドーンという爆音を聞いていました。

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るためにつくった穴や地下室。

防空壕から出て、すぐに荷物をまとめました。着の身着のままの姉二人、母、私と妹の五人で、防空壕から出てすぐ、父親、弟、兄、それからうちの店で働いていた親戚の方の四人に、

○着たきリスズメ 着たきりスズメ 着たきりであること。また、その人。

「これでお別れですね。早く帰つてきてください。ぜひ、すぐ帰つてくるように。」と、そこで親子の別れをしました。

そして、船がもう決まつてしましたから、すぐ船にということで港に急ぎました。もう着たきリスズメで、今考えるともう少し何か荷物を持つてきてもよかつたのではないかと思うのですが、みんな長年住んだふるさとから離れるというこのくやしさ、悲しさでもう頭がおかしくなつていたのだと思います。大した荷物も持たず、港に向かつたのでした。でも、私には、大切な荷物が一つあつたのです。それは、ガラスのコンポートです。私は何よりもそれを大事にしていました。それを置いてくるのがとてもくやしくて、それを手に持つてきました。船に乗つても大切にしていましたが、稚内わっかないで降りるときに船員さんさつぱるにあげてしまつたのです。もう引き揚げひあで普通ふつうの頭ではないのです。札幌さっぽろに来てからそのコンポートに似たものがデパートに売つていたときは懐かしくてたまりませんでした。私はすぐ買って、それを今でも大切にしています。

引揚船ひきあげせんの出航が夜の六時かんばんだったのですが、なかなか発ちませんでした。甲板かんばんに出てみたら、弟が

○コンポート 果物や菓子かしを盛る、足つきの皿。



イメージ図

防波堤で銃殺される人々

○埠頭 ふとう 船をつけ、人の乗り降りや貨物の積みおろしをするところ。

○金物 きんもの 金属性の器具。

リュックサックを背負つて、船の埠頭ふとうのところを歩いていました。私たちを見送りに来たのです。まだ中学一年生の弟です。これを見たときには、もう悲しくて悲しくて、みんなで泣きました。本当は連れていたかったのですが、女性じょせいと子どもしか乗れないことになつていました。私の父は町内会長もやつておりましたので、違反いはんしてはいけないということでこれを守つたわけです。とにかくにも弟がかわいそうでした。

うちは金物店をやつていたために、買い物に来ていた船員にお願いして、船長室やその近くに寝かせてもらいました。ほかの人たちは、みんな船底で、ぎゅうぎゅう詰めで横になつていました。

また、船でお産をする人もいました。「産婆さんばさんはおりませんか。産婆さんばさんはおりませんか。」という声を大分聞きました。船での出産は何かと大変だつたと思います。船はずいぶんと揺れ、稚内わがないに着いたのが次の日のお昼ぐらいでした。のどが渴くし、しかも何も食べることはできず、本当に大変でした。

稚内わがないの駅前にあつたお店屋さんの二階を一部屋借りました。畳たたみも何も敷いてありませんでした。そこで、父たちが帰つてくるのを一ヶ月ほど待ちました。その間私たちは、父が逃げに



イメージ図

ガラスのコンポート

帰つてくるのを期待して、毎日、稚内の波止場に行きました。それでも父たちは帰つてきました。稚内で待つことをあきらめた私たちは、俱知安のいとこを頼つて、五人で向かいました。そして、俱知安で五年間過ごしました。

二年後に父たちが帰つてきましたが、私たちには一銭の貯えもありませんでした。姉たちは裁縫さいほうができたので、その代金で食べさせてもらつたり、農家のうかに行つて働いて、そのお金で食べさせてもらう、そのような生活がずっと続きました。本斗ほんとにいたときは家が裕福で何の不自由もなくすごしていましたが、引き揚げひあげてからというものはそれどころではなく大変な苦労をしました。

私はどうどう上の学校に行けず、女学校だけで終わりました。たまに樺太からふとにいたら今は何をやつているかなと思うことがあります、樺太からふとに行つてみようとは思いません。戦争によつて、人生が総狂そうくるいしてしまつたのです。そのことが本当に残念でなりません。

DATA

平成21年度西区平和事業

聴き取り

・平成21年9月17日

・西区役所



笠松貞子(かさまつ・さだこ)さん

・昭和2年(1927年)生まれ

・札幌市西区在住